

テーマ：「鶴岡サイエンスパークの挑戦」

講師： 富田勝氏
(慶應義塾大学先端生命科学研究所 所長)

日程： 2022年11月21日



鶴岡サイエンスパークの取組みは、常識にとらわれない挑戦が発展の原動力となりました。2001年に田んぼの中の研究所として始まりましたが、若手や中堅が独自の発想で研究を進めたことで複数のベンチャー企業が生まれ、地域の姿は大きく変化。「普通のことはしない」という理念のもと、人と違う発想を重視した点が特徴です。特に、ITを活用したデータ駆動型の生命科学は当初批判を受けましたが、現在では主流の研究手法となっています。膨大なデータから新たな知見を導くメタボローム解析の開発により、医療分野で世界的な成果を上げ、研究拠点としての評価が高まりました。

こうした研究成果を基盤に、若手研究者が起業し、医療、食品、素材など多様な分野で事業が展開されています。人エコム系やがん診断技術、腸内細菌解析などの先端技術は、世界中から人材を引きつけています。重要なのは、地域のためという発想にとどまらず、日本や社会全体に価値を生むことを目指す姿勢です。また、地方での活動そのものが創造性を育てると考えています。自然環境の中で本質を問い直し、既存の枠組みにとらわれない発想が生まれやすいことを実感しています。数字や効率だけを追うのではなく、本質的な価値を考える姿勢がイノベーションにつながります。

今後は「二地域居住」など新たな働き方の実証にも取り組み、地方から新しい産業や社会モデルを生むことを目指しています。田んぼの中から世界を変えるという発想こそ、日本の未来に必要な視点であると考えます。

1957年東京生まれ。慶應義塾大学工学部卒、米カーネギーメロン大学コンピュータ科学部修士課程・博士課程修了。同助手、助教授、准教授、同大学自動翻訳研究所副所長を歴任。1990年より慶應義塾大学環境情報学部助教授、教授、学部長歴任。現在、慶應義塾大学先端生命科学研究所所長。米国National Science Foundation大統領奨励賞をはじめ、第5回バイオインダストリー大賞などを受賞多数。計9社の慶應鶴岡発ベンチャーを創業または創業支援。(一社)鶴岡サイエンスパーク代表理事。

図1



鶴岡サイエンスパークの全体像

図2

参加型建築

先行事例：SFC SBC (Student Built Campus)
用途：滞在型研究教育施設 場所：神奈川県藤沢市辻蘭
運営：慶應義塾大学SFC



福澤諭吉の格言「異端妄説の讒(そしり)を恐るることなく、
勇を振て我思う所の説を吐くべし」の実践